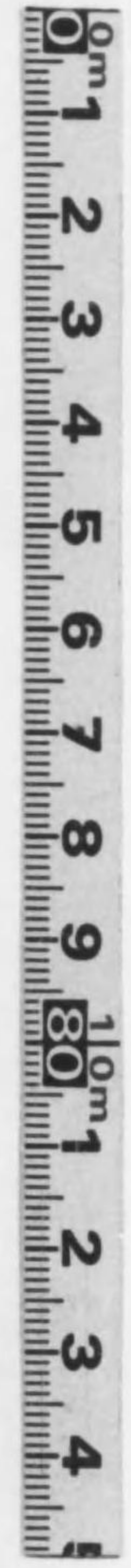


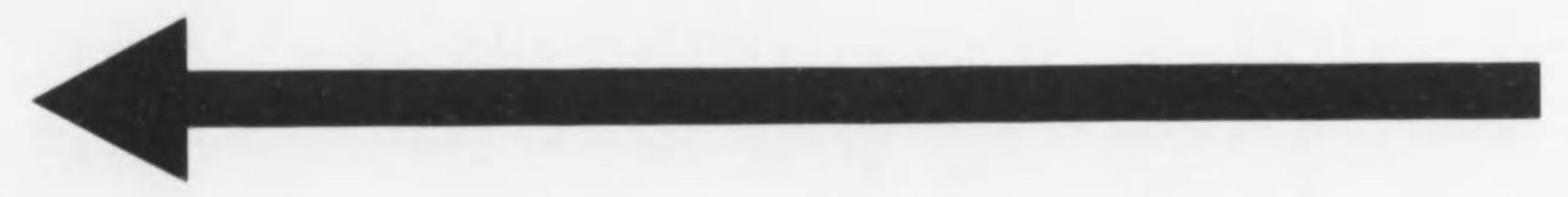
特 277
371

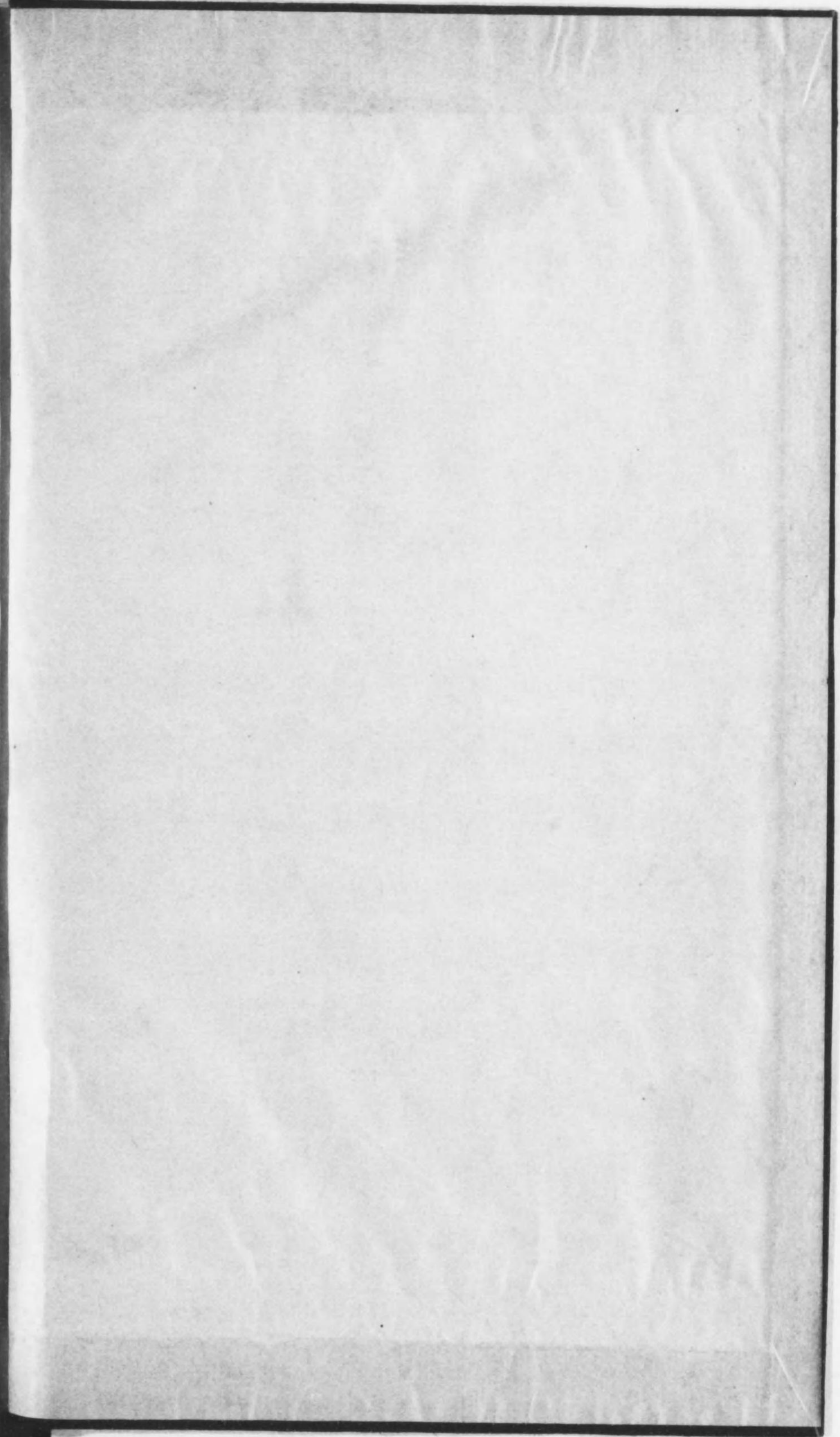
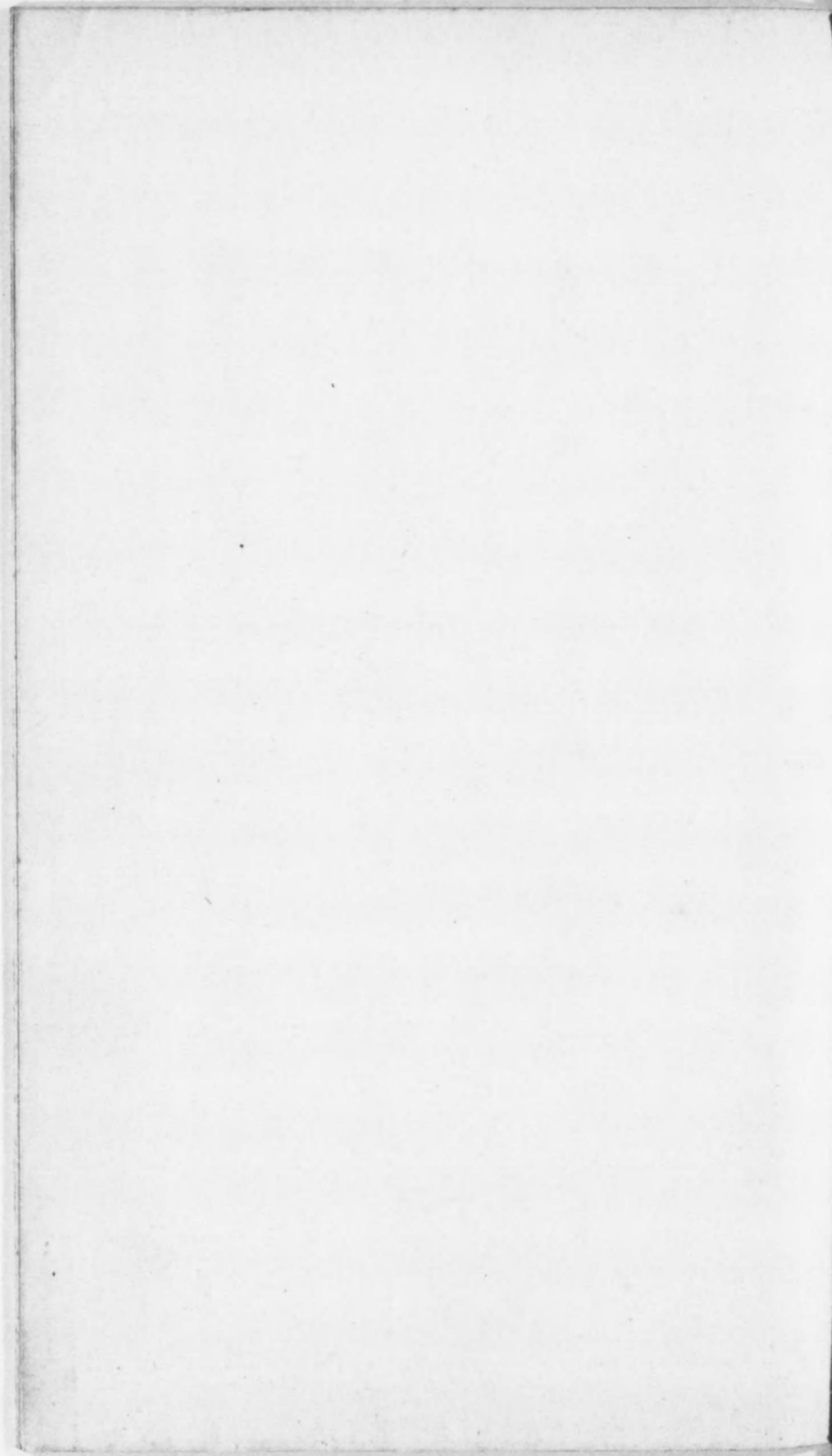
特277-371
76W10310

天神社御縁起
全



始





樹卷^母阿屋^尔畏^伎瑞^乃水屋^尔敷^尔鎮座天神

國端立^給御相^尔殿^尔坐

皇大神^乃御名^乎佐^閑他神^乃神名^登誤傳^布苗事^登成來^志

畏^母畏^伎事^乃極^美尔^曾有^祈苗爰^以古^文尔^激志^古老^乃語

傳^布苗言^乃葉^乎天下四方^尔方^尔声^乃限^里乃^大声^尔宣傳^布

事年月^尔何日^志加

明治大帝^尔閑上^祈畏^久母^御親裁^尔依^里元津^神乃^御名^乎

奉^里称^里奉齋^苗尔^至里^志波^暫志^天岩^户尔^籠坐^世志

日^乃大神^乎迎^閑拜^美奉^里志^群神^乃阿那^嬉志^屋阿那



樹卷^母阿屋^尔畏^使瑞^乃水屋^尔敷^尔鎮座天神

國常立尊御相殿^尔堅

天照皇太神

天兒屋根命及御山^尔神集給^布天神地祇八百萬

神卷^乃廣前^尔神官從八位^{大澤菅二}謹^美敬^比畏^美畏

^{美母}申^{佐久}

皇大神^乃鎮座^須天神^乃社^波神代^乃昔流^{礼母清}使天

安河原^乃片邊最^母畏^使八百萬神卷^乃神集^比尔集^比

神議^里尔議^里給^布會場^尔奉齋^里給^比志我皇大御國^尔

最^母止事^那國家鎮護^乃大宮柱^那里平城莫都^比志母

日本魂^乃赤^使乎表頭^須紅葉^乃秋篠川^乎枕^尔流^苗々水

^乃音^河乃鼓^乃響^乃閉^乃召^志千歲^尔餘^留年月^乎大宮所^登

經過^志給^比志尔中世^尔波

皇大神^乃御名^乎佐開他神^乃神名^登誤傳^布苗事^登成來^志改

最^母畏^使事^乃極^美尔曾^有祈苗爰^以尔古文^尔激^志古老^乃語

傳^布苗言^乃葉^乎天下四方八方^尔声^乃限^里乃大声^尔宣傳^布

事年月^尔何日^志加

明治大帝^尔開上^祈畏^久母御親裁^尔依^里元津神^乃御名^乎

奉祢^里奉齋^苗尔至^里志波^暫志天岩户^尔籠堅^世志

日^乃大神^乎迎^開拜^美奉^里志群神^乃阿那嬉^志屋阿那

樂志屋登躍里唯志給比志時乃如予護忠波只嬉志佐登樂志

佐乃古美上希來氏手乃舞比足乃蹈武所乎知良氏只管尔

嬉美厚美志波吾大神乃神隨尔所知食賜布事乃如志爰

以故乃飯田太籌波私邸乃地乎割伎神乃官居乃所登志氏

底津岩根尔官柱太敷立氏天津御空尔千木高知王瑞乃

御殿大美麗志久奉仕里氏明治三十四年十月十七日遷堅

志麻志奴其被全久飯田氏登其礼尔附隨布教信徒乃功績尔那

有那苗然苗尔王母天神乃御社尔古伎緣起乃文無志編輯

世年事年比日比思焦留文毛其乃機會無久其乃伍志王空志久

年月乎經過那婆今日乎見苗事今与里昔乎見苗憾阿里恰丹

善志今年瑞屋敷尔御遷堅五子里 二十五年尔那丹成希

留乎以王紀念乃事業登志王緣起乃文乎心合乃友登相議

里相語比王幽尔波大神乃助希乎冠武里王第一輯乎編美定

武苗事登成奴迨時國民乃思想母尔月尔惡伎方面尔流

福事字直後出往今日乃生日乃足日尔御饌御酒海川山野乃種尔御紋章

乃菊花乃味津物尔今度編美調閑志緣起乃文一卷取

添用告希奉良久登鹿久知毛乃膝折里伏世鶉知毛乃

宇那根津貴奴貴王畏美畏美母申須

大正十五年六月一日

明治天皇御教詔(明治三年正月三日)

关恭惟

有神自然... 天神 御社 古伎 縁起 乃文無志 編輯

世年 事年比日比思焦 留之毛 其乃機會無久 其乃伍志五空 志久

年月乎經過 那婆 今日乎見苗 事今 与里 昔乎見苗 憾 阿里 恰 丹

善 志 今年瑞屋敷 尔 御遷 堅 五子里 二十五年 尔 那丹 成 希

留乎 以五 紀念 乃 事業 登志五 縁起 乃 文乎 心合 乃 友 登 相議

里 相語 比五 尔 波 大神 乃 助 希乎 冠 武里五 第一輯 乎 締 美 定

武苗 事 登 成 奴 迹 時 國民 乃 思想 母 日 尔 月 尔 惡 伎 方面 尔 流

往 今日 乃 生日 乃 足 日 尔 御饌 御酒 海川 山野 乃 種 乃 尔 御紋章

乃 菊花 乃 味津物 尔 今度 締 美 調 閑 志 縁起 乃 文 一 卷 取

添 爾 告 希 奉 尔 久 登 鹿 久 知 毛 乃 膝 折 里 伏 世 鶴 知 毛 乃

字 那 根 津 貴 奴 貴 五 畏 美 畏 美 申 須

大正十五年六月一日

明治天皇御教詔(明治三年正月三日)

朕恭惟

天神

天皇立極垂統

列皇相兼繼之 越出 祭政 一致 億兆 同心

治教明于上 風俗美于下 而中世 以降 時

有汚隆 道有顯晦 治教之不洽 亦矣 今

也 天皇 運 循環 百度 維新 宜 明治 教 以 宣 揚

惟神生大道也。因新命宣教使布教天下。汝
群象庶其體斯旨。

朕恭惟太祖創業崇敬神明愛撫蒼生
祭政一致所由來遠矣。朕以寡弱夙養
聖緒日夜悚惕懼天職之或虧乃祗鎮
祭天神地祗八神暨列皇神靈于神祗
官以申孝敬庶幾使億兆有所矜式。

微臣橘香齋謹寫



今地未割制時多一吾神即吾神有籍
造化音福若福深之大哉。德皇親造化音
之傳被純人以和魂之仁多福若福深之
或故朕人以和魂之義以和七情若和家
自生音今地若物然吾聲平世
庶宜日休吾民佳安常佳吾人之心也。中
吾心魂一而不二。此其所發而玩妙用
于吾福也。求亦滿也。求自今地未割



お時玉後世弟初英雄形理宜勇
進軍

ちよ十五来ヤ一初二

在わ南修海舟也

菊地麻述文

漢徳

引

今の世の日に月に刈菰とこそ乱れ行くは神の御國に
生れつる人々かともすれば神の大真道を蔑するにまも
因るなる實にうたてさの極みなれ

さるにても今も尚大和の國中にぐまります天神社は
そのかみ天香久山の西北飛鳥川の流域に沿へる秋篠の
野邊にまよせし頃はまもその大稜威の炳焉なりし
は更なり瑞の屋敷にぐまります今日となりては跡が

上にその大稜威の加はりて際も涯もなし

天神の大真道は我等の生命にこそ我等の榮光に
こそ我等の精力にこそこそを忘れて我等に何かあるそ
も[『]天神社御縁起[』]は大真道を忘れがちなる御國
人を警め亂れ行く刈菰の世を神の大御代に立て
直さむとて生れ出はけるものにあれば讀む人なら
よくく心して天神の大御心を味ひ奉り天神の大
真道を行き天神の大神業を賛け奉る大武夫と

なまらまほし、

勇め奮へ天神の先駟をなむ仕らむと志せる我が大
御國人たち天神は我等と共にありやあすはぞ

大正十五丙寅三月初旬

橘 香磨くゝるす

天神社御縁起目次

- 一 御沿革
- 二 御祭神
- 三 御靈威
- 四 祭政一致
- 五 信仰勸告

相不満みお

そなたを色はなと家

みふふおん

そなたはみふふ

神はみふふ

紀國光

天神社御縁起

天神社々務所編輯

一、御沿革

謹みて大和國生駒郡安堵村東安堵水屋敷に御鎮座
ありしを我が『天神社』の御縁起を繹ね奉るに祭神は『國
常立尊』を中心とし向つて右には『天兒屋根尊』左には『天
照皇太神』をお祀り申してありしを開して此の神社は中古
即ち人皇第四十代天武天皇様(御諱を天淳中原瀛真人尊と

申し奉るの御時代には今も名高い彼の大和三山(香公山耳成山
卦傍山のこと)の殆んど正三角形に鼎立してをる其の中心部に
位せる大和國高市郡岡本の里今の白檀村の中なる木殿の
里に祀らるるありし其の木殿の里と云へば原と本殿と云い
流氷も清き遠く飛鳥川の南の岸に沿へる靈地でありありと
今も尚國史に名高い埴安池や藤原宮(持統天皇様の御宮)の
趾をとり並んでをるところから稽古して見ますると國史上極めて
重要地点であることは固よりであります

天武天皇様時代の『天神社』は高光る我が大日本國の最高宗
祠として崇められなむ其の社殿の如きも結構壯嚴を極め其の
祭典の如きも精華典麗を益し貴い雲の上人より下は粗末推し
る山人も至心に尊信敬仰したことを固よりあります

大吉『天照皇太神』が御弟素戔嗚尊の御振舞の餘りに荒々
しきに御立腹あそばされ天の岩屋へお隠れになられたことがあはした
其か爲に天地海山悉く真暗黒となりて何一つ見えなむ有様下人
は云ふまでもなく獸も鳥も魚も虫も全く途方に暮れおしたるを

八百萬の神々様は非常に御心配あそばさる天の安河原にお集
ひになり天照皇太神を出て戴くことに就いて大祓の詞にあり通り
種々御相談になられた結果即ち神集いに集い神議りに議りたまふた末
岩屋の前でトクノ篝火を焚いて明りを取り長鳴きする雞を集
めて高々と鳴かせ香久山から澤山な真神木を掘り取って其北に青
白の幣を懸け其の上に輝く鏡や光る玉を飾って岩屋の両側に
樹と桐の實の鈴生りに生北るのを取ってカラクと打振り(鈴の起り)
弓を六挺並べて管もて掻き鳴らし(琴の起り)笛や太鼓や柏子木

に合せて神々等が此處を専途と節面白く一生懸命に歌ひ囃し
たまひ天宇受賣命の如きは茅卷の弓を持ち胸も脛も現はにきも
面白さうに舞い踊りたまふたと云いますから其の賑やかさと云うたら
到底筆や口では云い現はを云い程のものであつたのは云ふまでもない
静かに岩屋の中に隠れおたまふた太神様も一旦は非常に御立腹に
おたまふたもの多々の神々等が同心協力して太神様の御機嫌
を直つて戴きたい片時も早く御機嫌良き大御姿を拜みたいとの
一念から起きた歌や囃が此上なく面白く樂々さうに岩屋の戸外に

聞え初めたのでさうも御立腹も自然に溶け果ては此上を嬉しく
楽しく又面白くて耐らす思召す程と有りよしたので遂に我知らず
岩屋の戸を細目に開けそらとお覗きに有りよしたので戸の側
に控へてゐた手力雄尊は矢庭に其の御手を取り奉り無理遣り
に出で戴いたのを今すもの真暗黒は忽ち無くなりて天地海山はパッと
明りなり暗に乗じて仕放題に悪いことをしてゐた邪神共は一耐
りもなき何處か逃げ散つて得も云へない太平無事の象が眼の前に
現れよしたので御心配や御苦勞の限りと益された神々等は皆々

躍り上つて喜べし諸声挙げて諸共にアナ面白やアナ楽しくやと天地に
轟くばかりとよめきたまふたといふことな皆人の知るところであります
さて其の時神々等の集いたまふたてふ天の安河と云ふところは彼の天
の岩屋と共に渺茫たる彼の天空の何處かに存在するやうに思つてゐる人
もあつたやうですが實際は世界のう上つ國即ち地上の天國を我が國に存在
する或地の名でありませ併し其の天の安河原と云ふところは何處にあ
らうかと云いますと確といたとは今に知れないのであります。が天の安河
即ち『アンノヤスガハ』は後世轉訛して飛鳥川即ち『アスカガハ』とあらた

形跡があるから今に大和の高市郡を緩やかに流れてくる飛鳥川は
正に太古の天の母河であったのであります。開いて河原と云はれてある
ら神々等は白くて雪のやうな清い真砂の河縁にお集いにたまたに相
違ない其の時も其の遠くの前からも神々等が何か御相談事があつて
寄合いたまふ時は必ず皇親即ち皇祖にして國祖にまします用闢元姫の
天神たる『國常立尊』と神漏岐尊『神漏美尊』の三神を祭り大御旨を
受くこととらてあつたから矢張り同様のことのあつたのは争へない
其の時神々等に依つて祭られたまふた天神即ち『國常立尊』の御

社が其の儘其の處に幾萬代も祀られることとなり天武天皇様の御
時代までも少の動ぎもなく太古の儘彼の飛鳥川の沿岸に御鎮座は
せられたのであります。

然るに天武天皇様の白鳳九年に皇后様(御諱を高天原廣野姫と申し奉る後の
持統天皇様の御事です)が畏れ多くも重き御悩みに罹らせられた。天皇様は非
常に御宸襟を悩ませたまひ種々臣下に仰せ給ふ御事奏の途を講じたま
はふた事ありまは御痛はるも疾を乞ふ効驗が見えなひのち天皇様
は畏れ多くも當時高德の聞えのありしを唐僧祚蓮と云ふ者た仰

せりけり金剛薬師瑠璃光如來の像を造らせ其れを宮中に安置
し薬師の秘法を修せしめりしとすと靈験忽ち現けり皇后様
は直ちに御平癒になりしなごて天皇様は御敬感の餘り彼の高市郡
岡本の里今の白檀村木殿の里なる『天神社』の靈域内(崇嚴雅麗な
一字を御建立あるは其れ彼の薬師の像を本尊として畏て御親ら
御開基あるは其れ寺狛を『薬師寺』と賜は立派な勅願所となり
すた我が國に澤山な勅願所はありますか實際天皇様御親ら御開
基あらせりしは始めに『薬師寺』(天武天皇様の御開基)あり

後に東大寺大佛殿(聖武天皇様の御開基)西大寺(孝謙天皇様の御開基)の
三寺のみならず如何に御崇敬の厚かりたかと思ふは自ら知れり開し
て其の本尊の薬師は最も優秀な世界第一の國寶として今も尚玄派
に残つてあります

其れから又我が國神宮寺の起りは人皇第四十四代元正天皇様(御諱を
氷高と申し奉る)の御時代に藤原武智麻呂と云ふ人が神佛両道を調和
する爲に神宮寺を建立しそのが其の始めだと云はれておりますが實際は
天武天皇様が國家の最高宗祠たる『天神社』の御境内へ『薬師

寺[」]を御建立にあらたのが其の始めだと云はれるのです
原の『薬師寺』の礎石は今も尚彼の木殿の里の叢の中に散在し
昔の記念とをりてゐるす

降つて人皇第四十三代元明天皇様(御諱を阿閉と申し奉る)の和銅三年
に都を寧楽に遷し平城宮と申されしにたが人皇第四十四代元心
天皇様の養老二年に彼の最高宗祠たる『天神社』も又『薬師寺』と
共に當時の右京(今の和國生駒郡跡村なる西の京、即ち由義宮跡のあると
ころ)の假殿へ御遷座にあらたが人皇第四十五代聖武天皇様

(御諱を首と申し奉る)の御時代に『薬師寺』の造営が眩ゆい程立派に出来
たと共に『天神社』の社殿も又神々々々見事に出来上りしして御神靈は
更めて其の御遷座にあらたが苟も一天萬葉の至尊が御遷都と
共に宮城の御近くへお遷しになる程の佛刹であり神社である史一と
軽々しいものでないとは云ふまでもあるをぬ其れと共に『薬師寺』
に於て年々『最勝會』と名づくる勅會が行はる『天神社』に於ては
嚴祭[」]と勅祭が行はる上下の崇敬の此止なき厚かたきとは固より
其の祭典の如きも以前に増しと美々しくあらはる云々も亦あるをぬ

特に『天神社』は何日の頃よりか『雨の神』又は『軍神』と呼ばれたや。い
武門武士の崇敬は甚だ厚かつたと云ふことと併し其の後漸々世は
乱ル人は狂い畏ル多クも皇室さへ御式微の御有様が見え初む程
と雖も人の敬神尊祖の念は弥々倍す薄らきさしむに賑々しく
時めきたまふた『天神社』も又迨々衰へ行き勿体なくも寧ろ人の稀に
供御さしもお粗末と雖も果ては花々かつた祭典さし何日となく寂
しさを勝りのみとて來りたる其れでも引統と行はれた『薬師
寺』の『修二會』の時を以て必ず勅使が下られて自ら一切の事務を

綜攬せられ其の下に辨官と呼ばる事務官ありしして勅使の命の
まに神事の一切を奉行したるものありし費用は全部大藏省の支辨
でありし勅使自らの朝夕『薬師寺』を拜すると共に又『天神社』を拜
し王法と佛法との両重を示ししす其れ等の諸官は祭典毎に必ず教日
前に同社附屬の宿院に來着し諸般の準備及び奉行を勤めたもので一切
の使命の終りをも皆其處に宿泊してゐたものなり

其の後世は鎌倉南業朝足利時代を経て元龜五年の頃に幸り川菰の
世は弥々倍す乱ル花は色を隠し鳥は声匿潜め春さへ知られず過ぎ

行く處の世の僅かに天日を拜し得る織豊時代は來つた時の筒井の城主(其の城趾今に大和國生駒郡筒井村筒井の里にあり)彼の洞峠下を爲し順慶が松永久秀の織田信長に背いたことを憤つて其北を右京方面に追ひ詰め火花を散らして戦つたものです。其戦畧の爲を知らざるが無法千萬に竟に『薬師寺』に火を掛けし然るに其の心を猶ほ勿体なくも『天神社』にまじり延び本社は固より金堂講堂を始め宿院其の他の營造物を全然灰にしてつしました。

けれども佛教の餘威は容易に衰へません。した爲め江戸時代に至りしして『薬師寺』は漸く再建されしめて今に其の儘残つてをまじり『天神社』は御運拙も再建さるゝに至らん彼の西行法師が「秋篠や外山の里のしぐらむいこよのだけに雲のかゝる」と詠んだ秋篠の里(大和國生駒郡平城村にあり)を流る秋篠川の片邊りに殆んど見る影もない小やかな社殿(宿院宮と呼ばれたまふ)を殘し縁に狐狸の栖むる蓬生中に埋もれ名もなき野末の祠として過ごし來たまふと、幾春秋果ては社名が『天神社』とあるのを見て『天満天神』の御社であると誤解し氏子は全くと絶え稀に事訪ふ人もなき時世時節と云いながら實に悲痛の極みであ

りよした

然るに熱烈なる敬神家であり、尊王家であり、門閥家であり、大和國生駒郡都跡村七條の大澤菅三護忠(従六位)大人(維新前に於ける國學者であり、勤王家であり、東京帝大文科講師であり、帝陵考證の權威であった大澤清臣先生(従五位の令甥)は大いに之を悲ぶ嘆き奉り、人知れず常に心ばかりの御祭りと続け、來りたのであります。が機あらば何れも世に出し奉らんと切に心掛けてをらる。此たのであります。然るに天祐か神助か遂に時到来り、明治三十二年明治大帝の御裁可を得て原の如く「天神社」祭神と「天神國常立尊」と訂正が

行はれ(従前は天満天神様が祭神でありと誤解せられておりましたから)明治三十四年十月十七日、因縁の靈地即ち今の瑞の屋敷(御遷座ありせられ其の後始めに世に出たふたのであります)「天神社」御遷座の議起りし以來祭神名の訂正に社殿の改築に境内の擴張に人の得知らぬ千辛萬苦を積み重ね、意気倍す軒昂今や銀髯紅顏全く神の如き大澤菅天人は今尚其の社掌として八十歳に垂んとすも老軀を捧けてをらる。今ついでに宮柱太敷き立て千木高知召して御稜威は天御空に照り映え御靈光は天瑞垣の外に輝き直り芽出たきた充滿ちをりませしが此處まで大澤社掌と

『天神社』講貞諸氏の苦心焦慮とは実に悲壯の極致でありました。紀念の爲にも秋篠河畔時代の原の社殿は今も尚現『天神社』の南側に祀られてありますが見ると涙の種とも程小やかなものでありまして當時の寂しい佛を偲ぶ好史料と云つて可い其の棟瓦や軒瓦には立派に十六瓣の菊花が鮮やかに貽されて其の祭神の最高至貴なることを如実に物語つてゐます又當時『宿院』の前に立てられてあつたと云ひ傳ふる『宿院御前』と勅した古い石燈籠も又紀念の一つとして今の神社の北側に貽され遠き昔を語り顔をも床しいぞす

此處に又『天神社』に附属せる極めて面白い行事の一つ即ち『莊嚴祭』のことを掲げても史的考證の一助としたいのであります其は四十年前まで行はれた『藥師寺』の『莊嚴祭』のことでありまして其の起原が全く『天神社』にありと信せらるゝからであります

莊嚴祭なる祭典は何日頃から始まつたか之を確かな記録も傳記もなから其れは何とも云へないのではありませんが半神半佛で『藥師寺』の産でありましたが死穢を忌むことは非常なものでした

『藥師寺』に於きましては毎年二月三日の晩に『莊嚴指』と云ふことを行

つたものです其れは翌年『莊嚴祭』を行ふ當番を指名するものが當番に當る家を『莊嚴當』と稱し其れに當る資格は相當の舊家であつて必ず氏神の宮座に列する者に限り又當つた家へは親族知音等が向ふ七日間手傳いに行きとなりておたが宮座に列する人々は太に巾を利かせ然らざるものは大に賤まゝの例でありました其の行事は餘程神聖なものとせられ極秘密に行つて誰にも見せないものでありまゝ総々の式典は神明祭祀の其れでありまして甚だしく死穢を忌むと云ふことは全く神事から出たものでありまゝ丹と當番が極りまゝと翌早朝『藥師寺』

の僧侶が盛装いたし物々しく赤丁二人を供に連れ榎の新材に牛一玉寶印を押したる符牒を挿んだものを番に當つた其の家へ持つて來り其れを受けたる家へ『御藥師様が來られた』と云つてお蔭年にお被様降らるたやうな大喜びで大に祝宴を張るのでありまゝ丹と來年の祭典の準備をいたしたものです

彼の『莊嚴指』も秘密行事をゴツリ覗いた人の説に依りまゝと僧徒が健気な山法師のやうな装束を着け侍者は炬火を翳し恭しく彼の藥師の前で祭文を讀み御宣託を得て當番を極めるのでありと

然るに當夜は近村の青年等は三々五々打連水て薬師寺の境内
に至り翌年の祭典の當番が何處の誰人なるかを知らぬと思つて抜き
足差し足鶴の目鷹の目片唾を吞んで神経を尖らせてをる若し何
處からか翌年の當番が知れると青年共は一齊に喊声を挙げ其の當
番の家へ殺到して其水を注進するこゝろをたれてゐた

其水から其の指された家は翌年一月二十八日から所謂ゆる『在嚴祭』
を行ふのでありすが準備の爲に其の指された年の九月に親族や
知音を召集し種々打合せの上料理方とか水汲人夫とか其水其水の

役割をしたものです

井と弥よ祭日に近づきますると親族や知音を招請す其水から
二月一日になりすと指された家から薬師寺へ齋米を納めるのであ
ります其の量は三斗三升俵四個と一斗七升俵一個とありあしそ
四俵は井桁に積み小さい一俵を其の上のと真中程へ重ねたものです
其水を枡で量る人は當日第一番の顔役で身には正しい袴を着け
而も其の側には一人の副が扣へてゐます其水から亦指された當家の主
人も矢張り嚴重な袴の服装をしてをりますが薬師寺から下

げり奇体を珠数を首に懸けよした其の珠数と云ふのは『鳥不止』
の樹の皮を剥き彼の恐ろしい刺を取り去り一寸宛位に切りて紐で
継いだものです而も其れが法外に長いので其れを懸けた人の姿は大に
異様であつたさうです并して米量りには二十人計りも跟いて行くのであ
りませうが半ば以上は礼服用に及び威儀をふして居並んでゐた
のです又薬師如來の寶前に於て米を量る時には『薬師寺』の僧
徒二三人が必ず其處に立會ひ檢分するの例でありました
納米の行事が終りますると指された家では親族知音を集め

て大祝宴を張り其れから縁故のある附近の神社々々へ御酒や
御食を澤山携へて参拜したものですが來客は皆豫練習に練習
を重ね晴みの日を待り小謡や狂言や種々の藝術を競
演することもなつてゐましたので其の賑やかさと云ふたら実に素晴らしい
ものでした其れが一週間以上も続いたと云ふのですから其の費用は莫大
のもののでしたと云ふ或識者の如きは彼の關係の四ヶ村（五條村六條村
七條村九條村）を諷して『西の京には村の芽を摘む貧乏の薬師がをる
から彼の四ヶ村には何日も金がないと笑つたさうです』免に角雅樂や

巫舞をい入れて夜も昼も飲み倒し食ひ倒し歌ひ倒し踊り倒した
のでありますから其が爲に村々の夥多しと被弊し其のは寧ろ當
然せず如何に信仰の結果とは云へ実に奇々妙々なことを行つたのです
『在嚴』とは佛式の語でありますか『祭』とは全く神式の語でありませ
す『在嚴』と云ふ語から見ますれば何か佛教から出た一行事のやう
に思へまするが『祭』と云へる語から見ますれば何れも神道から出た
一儀式のやうに考へられます又『薬師寺』が主として其れを行つたと
云ふ点から見ますると佛教から來てをうやうですが更に人々が

關係ある各神社を巡拜したところから見ますると亦神道から
來たやうにも思へます併し『在嚴祭』と云へば一つの祭典でありませ
んとは何人も直に領づくところで祭典と云へば又神道から來たもの
であるてふことは何人も直感するところでありませす其れ等の点か
ら云いますると『天神社』が未だ兵燹に四惟らせられざる當時の祭
典の佛の一部分の残つたものに『薬師寺』が便宜上『在嚴祭』と云
佛式めいた名を附けて自家のものとしたのでは無いでせうか兎に角
寺院が『祭』の字を用いたのも奇妙であれば人々が縁故ある各神

社を巡拜したのも又奇妙ではありませぬか

其れから又彼の櫃の新杖に挿んだ符牒に『牛王寶印』を押しあつたと云ふが今でも牛王寶印で名高いものは那智権現の那智御寶印又は熊野権現の熊野御寶印等であるところなごから考へて見ますると彼の當時の牛王寶印なるものは佛教と云ふよりも寧ろ神道に近いものであつたのであらう牛王寶印の形を見るに皆是れ如意寶珠である如意寶珠は原と是れ我が國の富斗摩迹のことで富斗摩迹とは天神の大御心の結晶とも見奉る

一 天現身即ち中心に『國常立尊』を宿し奉る大天日のことでありませぬから神道と離るからざる關係のあることは業已に疑いのないところでありませぬ果して然らば彼の牛王寶印は那智神社や熊野神社と同様原は『天神社』の御寶印であつたかも知れないさういたしますると『在巖祭』なるものは原『天神社』に附屬し來つた太古からの一行事ではなかつたでせうか或は天の岩屋の故事を真似來つたものではなないでせうか

牛王寶印は是れ大天日を意味する富斗摩迹の象徴であ

リヤチ^{リヤチ} 在巖指^{在巖指}を行ふ時真暗黒の中に炬火を焚いて御宣託を請ふのは天の岩屋の前で篝火を燃やした形ではありませぬか其の翌朝牛王寶印の据った符牒を送り込むと云ふのは天照皇太神が天の岩屋からお出まし下された形を行ったものでないでせうか指された家が飲めや歌への大散財を行ふのは太神様がお出まし下さったことを天に躍り地に舞ふて喜び勇まれた當時の神々等や人々の形を現はしたものでないでせうか

牛王寶印に就いては古來種々の説はありませうけれども其の説は兎も角とて實際上に於ける其の姿は如意寶珠には相違ありません如意寶珠の本来本元は神の御國の此の大日本でありますから苟も牛王寶印の附屬するところには必ず神道ありと云はねばならないのであります故に薬師寺^{薬師寺}の行つてみました^{行つてみました}在巖祭^{在巖祭}を天神社^{天神社}の祭典と見天の岩屋の故事を加味した神秘的行事と見るのが至當でありうと思はれるのであります

其れから又^{其れから又}在巖祭^{在巖祭}と云ふ語は天神社^{天神社}の全盛時代に於ては或は天照皇太神様の御光が再び照り輝いたと云ふ意味から照光祭^{照光祭}

とも云つてゐたものを『天神社』が御炎上にちりて以來『薬師寺』
が其の後を承け『莊嚴祭』と佛式のたるに改め数百年間其れを行以
來つたものではなういせうか

天の岩屋の故事は一寸聞くと一種異様な神話のやうでありあす人が
深く味はつて見ますと実に重大な神業の表現でありあして一切
宗教の原理一切道義の原則でありあす詳しく云ひあすれば宇宙觀
人生觀の規矩世界觀國家觀の準繩でありあす物的科学に頭
を固め心は冷え極つて化石のやうになつてをう人の目には彼の

故事の如きは殆んど何とも見えなうであらうか心的修養に靈
眼を用き神人兩界の消息を看破し得る人には實に花々々晴々
しい大神業としか見えなう筈です其の大神業が長く彼の祭
典に據つて紀念せられ來つたと云ふこと、ちりあすうと我が『天神社』
をうもの、御資格の如何に高きおわすと云ふことは自ら知れあす
因に云ふ現『天神社』御境内は飯田家邸内の一部を割きて献納せし
ものにて原と密生せる竹藪でありあして極めて物寂しい野邊でありあした
が神社の御遷座と共に追々整理せられ遂に種々の造営も出来設備も

出来ずして今日のやうな晴々しい有様とあらたのであります

二、御祭神

『天神社』を『テンジンシヤ』若くは『アマツジンシヤ』と訓むのは後世の誤りでありまして眞実は『アマツカミノヤシロ』と訓むべきものであります

其の故は神武天皇様が中國御平定後即ち橿原宮御造営の前にお降しにあらた御詔勅の中に

『みやけ宮室をかまつか経営りてついで恭みてたかみくら寶位に臨み以てかほかたからし元々を鎮め上はすなは則ちあらん乾靈國を授け給ひし徳に答へ下は則ちすの皇孫心し

きを養ふの心を弘いむし然しかして後に六合を兼かぬ以てみやこ都を開き八紘を掩おほいて宇と為こと人事可ことよからずや云々

と仰せられてあります

『かみ上は則ちあまの乾靈國を授け給ひし徳に答へ』

とある御言に基づいて皇祖天神を鳥見山にお祀りなされたのであります
ますが彼の鳥見山と云ふのは太古の天の安河原當時の飛鳥川の邊りの小高い丘陵に即ち今の木殿の里に祀られ來たまひつる天の岩屋時代の國常立尊の社殿の大廣前に靈時をお築きにたり皇祖天神

即ち國常立尊□の大御靈を祭り大孝を申べたまひ天の安河原の
神秘的故事を偲はせられたものと拜祭□されるのであります果して
然らば天神社□は没して天の神社□でもなく又アノの神社□でもなく
全くとは乾靈□の宗廟□即ち天神□の社□であります漢字で極め簡
單に天神社□と書いてあるので或は天満天神即ち菅原道真公の社
のやうに考へた人もないには限りませぬが其れ等は全く誤りでありました
其れから天神の意義を乾靈□てふ文字に依つて現はされたと
から見ますると天神社□の中心祭神は一方に天御中主神□の

御名を負ひたまへる國祖又皇祖にあらせらるゝ國常立尊□に
あらせらるゝことも亦自ら明かてあります
要するに木殿の里に祀られたまひし天神社□は切らた切れない神々様
の御約束に依つて太古から彼の地に御鎮座あらせられたものであつて
其の御靈威御靈徳を遍ぬく六合に及けてゐたまひやうに思は
れるのであります若し果して然りと致すれば我が天神社□の発端と云
ふものは極めて崇高至つて神聖なものであつて狐や狸や得体の
知れない邪神を祀つた淫祠とは全然異たることをするのであります其の

此より尊い神社が星移り物換り遂に平城宮側に遷らるゝ又今の
水屋敷に遷りたまふたと云ふは是れ又神々様の御約束に據るでせう
業已に具体化して我等の眼に見えたまふ國土となりせたまふたか
らは『國常立尊』と呼び奉るは當を得てをるが未だ完全に具体
化したまはさる以前即ち漸く無より有に入りたまふた當時の御姿は寧
ろ『天御中主神』と呼び奉るが名実相應である故に其の御性質
の一斑をでも知らせて戴かと思はれ『天御中主神』の御名に於て先
づ其の真相を窺ふの要があります今試みに我が國獨特の語

源より其の御名の中に含まれてをる御性質を窺い奉るゝと畧
は左の如きものとなりませう

『アノミナカヌシノカミ』と云ふ言の葉を先づ一字々々解剖いたしませう
『ア』字は大本初頭を意味し全体成就を意味し一切含藏を意味す即ち無
より有を生ずること生したる有は必ず完全に成就すること而して成就せる
完全體の中には必ず一切の真理を包含してをること等を意味して
る事故に真言宗等では最も大切な声字であるといふ『阿字門』と
云ふ一部門を立て『阿字觀』と云ふ一觀法を立て、をる程です

若し夫ル^ア字を廣く見ますれば全大宇宙か夫ルとなります若し之を狭く見ますると我等の一身體とちものてあります故に全大宇宙を指す天の字は^{アノ}と訓せしめらる^アより始す我等の神経中枢のありところ即ち頭を^{アノマ}と訓せしめ矢張り^アより始す^アより始すのほかに其の一例てあります後^アて始めて無より有を生し其の生したる有を完全に成就せしめらる^ア而も成就せしめらる^アた完全體の中に一切の真理を包含せしめらる^ア國祖様の御名の初めに^アの字の冠せられたことは固より當然のことてあります

^ア字は初発の形を意味し生育の力を意味し循環の働きを意味す一切の物の始めて生するや必ず旋回運動から始するのであります此の世界や日月星辰も皆陰陽両氣の左旋右回運動に依つて出来たもので落葉樹が雪や霜の冬から免がれて暖かい日の光りを浴びる春の最中頃枯れたやうな梢の此処彼処に可愛い若々しい芽を吹き出します其の芽は必ず右か左へ環つておます環るとは^ア芽線^アてあります花の蕾も初めて出た時は必ず何方か環つておます物の始めは^ア芽^アてあります^ア芽^アは必ず生育の力を具へておます并して其ルか初発の形てありますから

『ア』字の次に『メ』字の続いて出たのは実に奇々妙々であります

要するに『ア』字は幽界全部の起初であり、『メ』字は顕界全部の始原でありますから『ア』『メ』と唱へる言の葉の中に顕幽両界の全體即ち全宇宙の一切が包含されるのであります。実に絶大な神祕的事実ではありませぬ。『ア』字は上下の言の葉を繋ぐ接続詞でありますから別に解剖の要はありませぬ。『メ』字は産靈の狀態を意味し創造的進化を意味し本能的作用を意味す即ち完全に成就せしめられたる物が神の命のまに、其れから其れへと生成化育の狀態を持続し年々歳々他の力を藉らずに

創造に類する進化を保続し并して神から賦与せられた本來の役目を果すべく種々の仕事をたなすのであります。例を挙げて申し上げますと此處に一粒の桃の種子を地上に蒔き付けますると、或時期に産靈の働が始まりまして芽が出ます。其れが漸々成長いたしまして幾年か後には花が咲いて果を結じます。一旦其の域に達しますると其の後は年々歳々一番最初神から其の種子を造られたやうな具合に巧みに又種子を造つて子々孫々繁殖の大仕事を続けます。其の種子を造るのか創造的進化であつて又本能的作用であります。宇宙一切は實に此の原則に支配

せらるゝ生滅起伏してをるので『』字は即ち一切形あるもの、主権者であり親権者である従つて該字は中心の玉座を意味し又一切を統治するの實力を意味すること、たゞそのです

『』字は親和力を意味し抱合力を意味し調節力を意味し現在の言葉で云へば求心力である

『』字は張大力を意味し無碍力を意味し照破力を意味す今の言葉で云へば即ち遠心力である

若し夫れ右の兩字を合せて『』と叫ぶ時は遠心力を包含せる

求心力と云ふこと、たゞそののでありやす

『』字は貫通を意味し聯絡を意味し相互を意味してをる恰も一條の緒か幾十百顆の珠数を貫いてをるやうな形を云ふのです

『』字は緊約を意味し基礎を意味し結合を意味す例へば右『』字のやうな場合に於て其の原状を可成的長く持続せしめ容易に介離散せしめないやうにする力を云ふのでありやす

併して右の兩字を組んで『』と云ふ時は絶対的権力の中心と云ふこと、たゞ『』とは即ち隱身して意味をありありと實在を知ること、が出来ても

具體的に其のお姿を知り得ない大靈格と云ふのであります
國祖様の御名の裏に含まれてをる真理と原則とは其の一斑を現は
したわけでも実に右の如く高遠にて博厚なものです苟も天神社の崇
敬者たる方々は是非此等の消息に精通し弥々倍す崇敬の信念を
深められたいものです

さて何もなかつた宇宙の真中に天御中主神又國常立尊と稱し奉ら即ち開闢
元始の天神であります生れまして始めて高御産巢日神(靈系の獨神)神産
巢日神(肉系の獨神)生れし其れより宇麻志阿斯訶備比古遲

神(獨神)天常立神等の諸神が順々に生れましたのであります然るに
最後に生れました伊弉那岐伊弉那美の御両神は天神の勅命に
依り此の多陀用幣琉國を修理固成さむと思召し種々御苦勞遊ばさ
れた結果大八島國及び諸の物を生みたまひましたか更に御相談あり
我等は既に大八島國及び山も川も草も木も存りと有るものを生み
終あめがたまきみへたのでありから此の上は天下の主たる人を生まぬはなからたとい
と仰せられ日の神即ち天照皇太神様をお生みになられた御名を大日
靈貴と申されました此の神様の光華明彩にあらせられ遍照く六合

の内を照徹したまふ御徳を具へさせられたので岐美両神様は大に喜ばれ
吾か子^{わがこ}は数多あるけれど未だ曾て斯様に立派な子は生れたこ
とはないと此の國に止め置いては宜くない早く天上に送つて
天上の事を知らしめねばならぬ

と仰せられた連綿として萬古洵ることなき我か皇室の御先祖とな
したまふたのであります其れから天照皇太神とは其の實際は天御中
主神^{あまのみちぬし}が其の大御心たる極真極善極美を綜合して御身を天上に現
け世界に照臨したまふお姿を讚美し奉つた御名であります

并して天照皇太神様は我か皇室の御先祖にあらせられたのでありま
すから実に此上なき有難いことでありませう伊勢の内宮は即ち此の太神
を齋き祀り申してあるのは云ふまでもありません

其れから又其の一方に祀られたまふ天児屋根尊は即ち天照皇太神
の大臣にあらせられたりして神御産巢日神の御子であります天孫に従つて
お降りにあらた御力でございまして中臣連や藤原氏の遠祖に當らせ
られます奈良の春日大明神若くは河内の牧岡神社の祭神は即ち
此の神様であります後て此の神様は我か皇室直屬臣僚中の

最古参最高位の御方でありませす

右の如く極めて古い三大神を祀つてある天神社は實に有難い神社でありますが今では漸く村社に列せられてをうられます

抑も現在天神社の御鎮座は瑞の水屋敷に靈地は其の源を昔の富即ち鳥見の里附近に發すると云はれてを富雄川の東岸二三町のところにありまして同社の優美な祭典が今も尚其の堤防の上で古典的に行はれてありませし東には官幣大社石上神宮を望み西には同龍田神社を眺め南には同廣瀬神社を東南には同大神々社東北には

同春日神社を拜み得るものも亦何かの因縁に依るものではありませしか
兔に角と眞白に梨の花咲く春の辰紅葉が錦織りなす秋の夕静
寂太古の如き天神社の社頭に無理ならぬ願事申して汚れたる身を
心をも後い清めらるゝ時の心持ちは實にや太古の神代に生れ還らざら
ずであると皆人は云つてをうませす

三、御靈威

我が天神社の御沿革御位置等は右の通りであります但其の御靈威の灼乎をとも亦極めて偉大なるものであります先づ其の

例の一二を挙げておせう

現在に於ける同社は表面最爾たる一村社に過ぎませぬ併し其の氏子は同社の所在地たる安堵村なる飯田氏外数戸に出ないが東京九州大坂四國等の各府縣に散在し其の人員は随分澤山ありき然るに其の多くは同社に祈願を捧げて醫藥の及ばぬ難病を救はれたる人々の及ばぬ災厄を免がれたる人々でありし其の有難味が深く骨髓に沁み込んではりますから其の信仰の清らかなことはいいとは殆んど類例を見ませぬ故に毎年行はれる春秋兩期の大祭には不知火燃ゆる筑紫の涯よ

り侍た鴟鳴く東國の空より又暖き南國の愛媛あたりより北は数冬で名高き羽後あたりから我も我もと打集い来て「天神社」の大廣前は人の潮逆捲き柏手の音祝辞の声喧しく長閑な太鼓の響き晴れやかな竹笛の声々流れて昔々そのらの神代の有様を見するのであります

特に永遠より永遠に亘り萬世不朽の皇運を扶翼し兆歳不変の國體を擁護したまふ神社にせよせば苟も我が國に仇をす者のある時は必ず皇軍の上に奇りき光りと力と幸とを惠みたまふのであります既に國を賭して行はれた明治三十七八年戦役の特などには同社から忠勇なる我

が將士に對し幾千萬の護符を授与せられたりてありしが役終つて後各
團隊から真心籠めた奉謝状が数限りなく社頭へ舞い込んだのですが
其の奉謝状は紀念の爲にと云つて今尚同社に保存されてあります其
の文意を瞥見いたしまするに同社の御靈威が彼の護符を通じて
如何に我が將士の上に必からぬ光りと力と幸とを与へたまはしむことが明かに
窺はれます其の爲にや時の陸海軍大臣より戦利品たる巨砲弾一
個と探海燈一基其他種々の兵機を奉納せられ偉大なる御神
徳を奉讃せられた其は今も尚同社の南側縁深き常盤木の
邊りに飾られて皇軍の大勲功を物語つてあります

其れから又『薬師寺』が初め『天神社』の靈域内に建立せられ秋篠川
時代をも其の行動を共にしたてふことは何等注目し値する程のことでもな
らぬのでありまするが心靜かに考へて見ますると全く宗教的因縁がない
と云へないのであります

彼の『薬師寺』の本尊薬師瑠璃光如来と云ふのは一名を大醫王佛と呼び
すて東方淨瑠璃國の教主だと云ひ傳へてあります然るに東方淨瑠璃國と
は此の世界の上には全く東勝神州たる我が國を云ふのであります并に薬師

瑠璃光如來と云、我が國に生れたまふた一神の垂迹であります其れ等の因縁から我が國家の最高宗祠たる『天神社の守護佛』として現はれ其境内に安置せらるゝに至つたものではないでせうか真理は常に眞々の中に働いてあります人間の目にも映らす耳にも響かないのでありますけれども種々様々な事實とちりて現はれたまふ人間が其れを見たり聞いたりして始めに鬼や角云ふのです因縁即ち必理の真理を以て事物の顯現する筈はないのです果して然らば『菓師寺』と『天神社』との因縁関係も亦深いことが知れまると同時に菓師瑠璃光如來を守護佛とすたまふた同

社の御靈威の程も自ら想像がつく譯であります

四、祭政一致

政は祭事とあります天神の大脚心を窺ひ且つ之を體神集はた集ひ神謀りに謀り面白く樂しく物事を改めろのが即ち其れです我が國現在の國會は西洋から渡つて來たものやうに思つてをり人が沢山ありやうだが實際は機縁純熟して太古の天安河原の故事が再現したものであります民意を代表して議政壇上に立つ議員は即ち當時の群神に當るのてあります故に議院に於ける議員は何よりも先づ心誠意

君國の爲に常に先憂後樂の至情に富まねばならぬのであります
黨利黨畧の爲め將た賣石沽權の爲め君國を忘れて狂犬のやうに
忽ち唾み合い咬み合い血を流し肉を裂くやうな詰らないことは火でも
あつては有りませぬ然るに近來の我が國會は始終詰らない現象のみ
を見せてゐます此は第一君國を蠹賊するものでありはして全人神々
様の御心に適はない大典事でありませぬ後つて皇祖にて國祖にあらせら
るゝ我が國常立尊の御立腹は目に見え手に取りやりに拜察せられます
今更免や角申はしても過ぎ去つたことは致方はありませんが將來は

大に改むるたいのでありますさもなければ天譴神怒或は到り駟馬
も及ばない程の悔があるかも知れませぬ

苟も神聖なる國政を議するところでありませぬから議院には先づ天神
社の如く國常立尊、天照皇太神、天児屋根尊の三神を奉祀され
たいのであります其れも現今の議員其のものは業已に天の安河原に集い
たまひし八百萬神の遺裔でありませぬから萬事輕々しい祀方は可けな
い祖先たる群臣の如く可成的嚴肅に仕麗にあらねばならぬとす併して
開院式及び閉院式の時は必ず嚴重なる祭典を其の大廣前に行ふ

て一意君國の爲に公明正大に政を議し少く私情我意を加へないこ
とを誓はねばならぬと毎日開會及び閉會の時は必ず須臾
最敬礼黙禱を続け將來を警め既往を省みよる要かあります
若し然ういたしますれば議員と雖も皆一つの良心の持主でありますし
目の上に神々しい社殿が御鎮座になつてをりますから自然我慾我慢は
消え嘘は云へなくなり策は用いらなくなり荒い語は使へなくなり
拳骨も振上げられなくなりまから議政状態が自ら公平無私となり
議員同士の間も自ら調和されるので天の安河原當時の盛事を親り

見得ることとなります若し然うなりますれば自然府縣會や市町
村會も其れに倣ひ來ますから國中到るところ和氣洋々何日春風
駘蕩の時ゆきな心地がたいますのは固よりあります若し又然うなり
ますれば官公署は固より私の家庭に至りまを何處を叩いては可堪り
が起たなくますのは當然です其處に敬神尊祖の赤誠が湧いて来は
て國中皆々中善く笑ひ笑ひ事を行ひ物を成し所謂ゆる惟神の大
道自ら啓け來ると共に此上をく我が皇威と國光とは自ら八紘に照り
輝くのであります其れが先帝陛下は御維新の初めに當り畏くも

御教詔を煥發したまひ祭政一致の忽にすべからざること將た惟神の大
道を宣揚すべきことを訓へたまふたのであります

人は現代を見て文化の絶頂だ開明の極巔だと稱へておますか何
が文明の絶頂ですか何が開明の極巔ですか今の人間に公理や公道
を辨へてをるものは何人ありますか其れを辨つて如実に其れを実践躬
行してをるものは何人ありますか多くは是れ私利我慾の塊で自己の
利慾をさへ満足せしめ得るならば國家が何うならうと社會が何
うならうと一向お構ひなしの人々のみではござらんか故に敬神尊

祖の念慮の如きは殆んど痕迹をも止めないと云つても可うならぬ到る
ところ宗教の改造教育の刷新官紀の肅正は稱へられておても未
だ曾て何等の实效も挙らないのみか正反對に弥よ倍す悪化するのみ
であつて國家の前途は實に深く憂へらるるのであります

我か大日本帝國は世界の^上國であります其は各國に貽るる大聖
巨賢の豫言を始め多くの古典に其の理由が示されてをります
即ち我か國は天神の奠めたまふた上國であるからです何故に上國で
ありますか外國が人間の國であつた對し我か國は神の御國であ

るからです其の神の御國の民草たる人々が肝腎要めの神様を忘
れ去つたのでありますから何の方面も全くの闇雲で殆んど手の附けや
うも何もない有様です其れでありますから宗教も教育も改道も殆
んど滅茶々々です若し此の儘に放任して一切を成行きに任せて置き、
おぼたならん危険を外國思想が獨り幅を利かせよと遂には國
家の根底を危ふくするのは云ふまでもありませぬ

中には現に跳梁跋扈して居る外國思想を以て一時の流行物と
看做し何日か自然に消えて了ふものであると樂觀して居る人も

あります油断は大敵です蟻の穴から大河の堤の潰れ方ともあ
りませぬ特に今時を得顔の外國思想は又して線香の煙のやうな
稀薄なものでもなく千尺の岩のやうに随分根強いものです何
時の間にか自然に消えて了ふ雨後の虹のやうなものではありませぬ
故に危険極まり外國思想は片時も早く帝國の領土より駆逐
し去らねばならぬ其が爲には帝國臣民の総ては何よりも先
づ天神社てんじんしゃを崇敬し只管に天神が世界を創造したまひし理由
と我が帝國との関係や人類を啓作したまひし縁由と我が臣民との

間柄等を知悉し以て神人の關係若くは君臣の間柄等に通曉し
言挙げするを止め一筋に 列聖陛下に侍奉公申し
上げぬばなりませぬされば外國傳來の狂犬思想の如きは猫の
前の鼠の如く忽ち懼伏し倏ち逃散いたしますやいな時は天譴神
怒必ず到り竟には國を挙げて何んな憂目を見せらるるか知れよ
せぬ其の時に至つて泣いても悔んでも最う駄目です

加之ならず政戦以後の世界各國も實際に思想の中心を失つて
るや其の結果種々に動揺いたし今では従来の唯物主義
を捨ててよく志此てある唯心主義に憧がらるゝこととなりて来た
りし唯心主義の根底は全く堅牢なる純潔なる信仰心にある
ことが分つて来たのですがいざとなつて見ると何を何う云ふ風に信仰
して可いのか全く譯が分らないので皆弱つて来るのです何れは我が神
道に依り我が天神を慕ひ来ることをせうさしなげられれば今
後の世界は全く黑白も分らぬ常闇であります其の準備といはし
ますとも先づ我が帝國臣民は皆揃つて天神を信仰奉仕せぬば
なりませぬさしなげれば遠東の兄弟を善導することが出来

をいと共に神州の民として大に耻ぢねばならないことが出来ませう

五、信仰勸告

重ねて申し上げます我が國は神の國であります古も今も今から向ふも神の御國であります開して神は何日も何日も一秒時間のお休みもなく活きて働いて下さるてをります要するに我が國は神と共に栄へ神と共に耀く國であります神を忘る神を離るる片時も立てない國であります特に天神に背いては須臾も生きて行けない國であります故に苟も此の御國に生を享くる人々は何よりも先に神の實在を認め神の

道を尋ね神の道を知り神の道を行かぬばなりませぬ併し神と申ししりも得体の知れない邪神のことは何れも一軍一唯た我か古典の上に存在したまふ真の正しい神様のことを知って行いさすれば可いのです其か為には手前味噌のやうですが神聖無比にて而も如上の御沿革御靈威等を具備したまふ我が天神社を尊信敬仰したまはんとをお勧めしたいのであります

特に同社所在地附近は随分隠れた史跡に富んでゐます遙かの南には吉野連山重畳し多武峯大和三山は起伏一東の手近には春日山

三笠山布田山三輪山纏向山等綿亘し又近き東には螢で名高い長谷川佐保川が流れてより北から西へかけては法隆寺龍田川あり西から南に亘つては二上葛城金剛等の諸山連なり當麻の古刹も微見えて四季の眺めも捨てたものではありませぬ故に遊覧旁の参拜も極めて妙なり又同地は梨と西瓜の名所でありますから其の頃参拜されずると得て云へば芳香美味に飽くとも出来ませぬに角神道の甚しく衰へました今日此頃國家最高の宗祠であった天神社の氏子を一人でも殖やして行くのが神州の民たる我等お互の最大急務であります

曾て孝徳天皇様が

日 あまのつみ 天神の寄さし給じしたに 隨また方に今萬國を修めむと

す

と仰せられたことがありませぬが天神の寄さしなまじり大御旨のまに／＼修め且つ行いさへいたしませぬれば萬の國は八十綱かけて引寄するが如く何日の間にか我が上つ國の膝下に寄り集い來て命のまに／＼神業を賛けまゐることなむことを訓へ置き下されたもので實に有難い御言であり御旨であり御法であります今

其の譯柄を知つて戴く便にもと左に御製や名家の歌などを掲げて
皆様の御参考に供しませう能く能く味はつて見て下さい

明治天皇御製

國民はひとりひとりにおとりけり

とほつみおやのかみの教を

わが國は神のすゑなりかみまゐる

むかしのてづり忘るなまよめ

おはやふる神のこゝろにかなふらむ

わが國民のつとすまことば

めにみえぬ神にむかひて耻ぢまらば

いよのこゝろのまことなりけり

千早う言神そらむ民のため

世まやまられとおもふこゝろは

くらら山

神のまはるやあはれあはれ道徳

おほいほい人よ何きとせよと心お

乃木希典

象学弥尔



正二位基弘



皇位陛下 象学弥尔
三日月 弥尔 福家
奉命 弥尔 福家 也



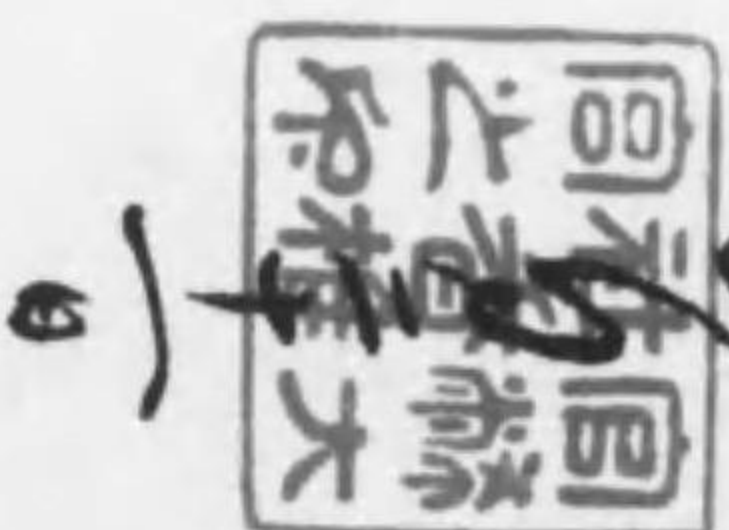
大正二年二月

象学弥尔 福家



象学弥尔 福家

掛麻呂母畏政香椎宮大前當高後六位藤井貞
 恐美忍母白在之今同皇辰宮了詣丸地給照
 今日與皇始末辰三日間大神守了御心表慶奉
 良善登大和國入天律神社常大澤宮立守寶福
 宗舞舞法奉靈故福大前看御候御酒種
 雨播奉年唱伏表平久安之聞候志此
 守賀家再身再福日曲奉無久歌
 也歌乃曲奉出久舞奉也乙女乃振美
 志久轉樂去久河奈面白久法奉志未給開
 望恐美忍母白在



昭和三年五月三十日印刷
 昭和三年六月十日發行
 (非賣品)
 奈良縣生駒郡都跡村七條
 發行者 大澤 菅 二
 奈良縣山邊郡丹波市町川原城
 印刷者 松 田 實
 奈良縣山邊郡丹波市町川原城
 印刷所 周榮舍印刷所
 奈良縣生駒郡都跡村七條
 發行所 大澤出版部

309
243

終